九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

行巻よりみた北宋初期古文運動について ： 王禹偁を手がかりとして

東，英寿
鹿児島大学教養部 ： 助教授 ： 中国文学

https://doi.org/10.15017/9683

出版情報：中国文学論集. 22, pp.29-48, 1993-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

行巻よりみた北宋初期古文運動について

――王禹偁を手がかりとして――

東　英寿

はじめに

北宋の歐陽脩や蘇軾・王安石などの古文家の文集には、少なからぬ駢文の作品が残されており、その作品を見ると彼ら古文家は駢文作成に巧みであったことがわかる。古文と駢文との関係を考えると、これは一見不思議な感じを抱かせるかもしれない。しかし、当時の古文家達が皆官僚であったという事実を考え合わせるとそれは当然のことと言える。

まず、官僚になるための関門である科挙試験に及第するためには、形式の決まった文章、すなわち一定以上の駢文の技量が必要であるし、官僚となって活躍するには、駢文作成が必須の条件であった。たとえば、官僚の花形である翰林学士や知制誥は、駢文制作が巧みでなければつとまらないのである。

宋代は、従前の貴族社会とは異なり、自己の実力によって出世ができる士大夫の社会である。こうした階級社会においては、文人達も一定の地位を占めるために、様々な社会的条件や制約をクリアする必要がある。所謂古文家という文人達も科挙及第という関門を突破することを目指していたことは看過できない。ところが、従来古文運動について論及する場合、古文家が駢文を創作していたという事実には注目せず、古文家の理念の探求やその思想の源流をそれ以前の作家に求めることに主眼を置き、古文家が駢文重視という制約のある科挙の試験を如何に突破し官僚となったのかという側面は全く着目されなかったと言える。

本稿では、かかる側面に着目し、北宋初期における古文運動を科挙試験との関連を機軸にして考察し、科挙という社会的条件をクリアし、官僚となっていく古文家達の実態を能う限り明きらかにし、従来とは違った角度から古文運動を捉え直したいと思う。

一

まず、本章では宋代の科挙制度の整備状況を糊名法・謄録法を中心に確認しておく。

荒木敏一『宋代科挙制度研究』[1]によれば、宋代に創設され、明・清にも受け継がれた重要な科挙制度は次の九つであると言う。

一、殿試の創設（太祖朝）　二、登第即釋褐の創始（太祖朝）　三、別頭試の設置（太宗朝）四、糊名法及び謄録法の設定（太宗～仁宗朝）　五、三歳一貢の制の制定（英宗朝）　六、殿試における策問の採用（神宗朝）七、明経諸科の廃止、進士科一本槍の確立（神宗朝）　八、殿試に於ける黜落制の撤廃（仁宗朝）　九、進士科に於ける詩賦の廃止、経義・論・策の採用（神宗朝）

こうした制度は、おおむね神宗朝頃までに創設されており、これらによって所謂科挙制度の近代化は達成されたと言える。これは、逆に言えば、宋建国後神宗朝に至る百年余は、科挙制度が未整備で様々な弊害があった事を意味する。これらの弊害を改めるべく、制度上に様々な改革を試み試行錯誤を繰り返していたのが北宋初期の状況であった。ところが、これまではともすれば完成された宋代の科挙制度をもって、宋代全体を考えることが多く、従ってそれは北宋初期について言えば全く実態に即していないことになる。特に、北宋初期には殿試の創設と並んで重大な改革と言える糊名法・謄録法が未整備であったため、科挙における事前の運動・請託がまかり通り、実力本位であるべき科挙の試験の本来の姿を大きく変質させていた。

ここで、糊名法・謄録法の創設について説明しておくと、答案のはじめに書く姓名、貫籍、三代の名諱等を糊づけする糊名法が宋代で最初に採用されたのは、淳化三年（九九二）の殿試で、景徳四年（一〇〇七）には省試に創

設され、それにともなって糊名の専官を置き、諸州解試では明道二年（一〇三三）に創始された。一方、答案を全て写し取る謄録法は、大中祥符八年（一〇一五）に省試に創始され、景祐四年（一〇三七）に諸州解試で採用されている。とりわけ景徳四年（一〇〇七）の省試における糊名法の創設が科挙の事前運動の消滅に大きな契機をもたらすこととなった。すなわち、試験官は答案が誰のものか判断できなくなり、従って事前に運動を展開していても、採点には全く反映されず、その効力を失ったからである。

ところで、当時の科挙の競争率をみてみると、咸平五年（一〇〇二）の六十六倍をはじめとして、ほとんど十倍以上になっている。[2] かくの如く競争率の高い試験に合格し、官僚となることを目指していた当時の文人達にとって、そこに事前運動の道があるならば、それをうまく利用して何とか合格を果たしたいと考えるのは当然であろう。

そこで、当時の事前運動にはどの様なものがあったかと言えば、「公薦」、「省巻」（公巻）、「行巻」の三種類が考えられる。

公薦とは、台閣の近臣が優秀な挙人を直接知挙官に推挙する制度であったが、宋代初めの乾徳元年（九六三）に太祖がこれを禁止したため、以後行われなくなった。[3]

省巻（公巻）は、解試または省試に先だって、科挙受験生が直接貢院に詩文を納める公的制度である。ただ、この制度には当時既に種々の弊害が生まれていた。『宋會要輯稿』選挙三によれば、挙人が他人の文章を借用し、自分の省巻としたり、古い省巻を用いたり、あるいは書き手を雇い入れたりするなど、様々な弊害が指摘されている。これらの弊害によって、省巻はもはや試験前に受験生の優劣を判断する拠り所とはならず、形骸化していたことは否めない。

それでは、当時十分に機能していた科挙の事前運動はと言えば、それは「行巻」という制度である。行巻とは、科挙の試験前に試験官や有力者に私的に自分の作品を献呈し、自分を売り込む手段である。唐代における行巻と文学の関係を取りあつかった程千帆『唐代進士行巻与文学』では、行巻を次のように説明する。[4]

いわゆる行巻とは、科挙の受験者が自分の文学作品に手を加え、清書して一巻にしたうえ、試験前にそれを当時の政治・社会・文壇において高い地位を占めていた人たちに送ったもので、彼らから主司、すなわち試験を

主宰する礼部侍郎に推薦してもらうことによって、合格の可能性をいっそう高める一つの手段であった。

ところが、この程千帆や羅聯添『唐代文学論集』[5]では、所謂近代化された宋代科挙制度を念頭に宋代全体を考えてしまい、従って宋代初期については科挙制度が未整備であったことを見逃し、宋代では全く行巻が行われていなかったとする。しかし、後述するように宋代初期、すなわち糊名法・謄録法が創設される以前には、科挙の事前運動としての行巻が確実に行われているのである。

ただ、このように有力者に作品を献呈するという行為は、何も宋代に始まったのではなく、宋以前にも当然行なわれていた。しかし、宋以前は基本的には貴族社会で家柄が重んじられており、貴族として良い家柄に生まれなければ、たとえ有力者に作品を献呈したところで、大部分はその効果がない。もちろん、唐代では、科挙制度が次第に定着し、進士科合格は官界でのキャリアコースとなった。しかし、実際に任官するためには更に吏部の任用試験に合格しなければならず、ここに六朝以来の家格や門地の意識が濃厚にもちこまれていた。ところが、宋代は完全に門閥貴族の枠組みが取り払われた士大夫の社会であり、科挙に合格すれば家柄の如何にかかわらず出世できる実力本位の社会となった。この社会を支えるシステムが宋代科挙制度なのである。ただ、科挙制度が宋初には未整備であったため、事前運動としての行巻がそのシステムの中にはっきり組み込まれていた。貴族社会では、有力者への作品の献呈が出世のための事前運動のシステムとしては確立していないので、作品のやりとりがあった場合、漠然としていて個々の状況に応じてそれぞれ検討せねばならないであろう。これこそが貴族社会時代の作品献呈と北宋初期の行巻との大きな違いである。

では、行巻を受け取った有力者はどの様な行動を取るのか。彼らが取る行動は「延誉」と言われる。[6]延誉とは本来後進の為にその名誉を広める事であるが、行巻制度においては、科挙及第を保証する意味を持つ。つまり、当時は作品の送り手が行巻をし、その受け手が延誉をするというシステムが社会の中ではっきりと位置づけられていたのである。

二

さて、本稿では科挙の事前運動である行巻の制度が、省試以前に確実に行われていた景祐四年（一〇〇七）頃までを北宋初期段階と考え、その当時の古文運動の一端を王禹偁を手がかりとして考えたい。ここで王禹偁に着目した理由は、一つには当時の他の古文家達と違い、彼は知制誥を経て翰林学士に任命されるなど社会的に高い地位についており、文壇に与える影響が大きいと考えたからである。今一つには、王禹偁は積極的に後進を誘掖しており、従って彼を手がかりとして当時の古文家の人脈・繋りが明らかになると考えたからである。

王禹偁は、五代の後周の顕徳元年（九五四）に生まれ、北宋の咸平四年（一〇〇一）に四十八才で没している。五代時代に生まれたとは言え、その活躍した時代は、まさに北宋初期である。彼は、文章は平易で有らねばならない事を主張した。特に当時の古文には、難解であるという欠点が表れつつあったので、王禹偁はその弊害を痛感し、平易で分かりやすいことが古文作成の関鍵だと考えた。この所謂わかりやすい古文の重視は、実は歐陽脩が嘉祐二年（一〇五七）の科挙を主宰した際に、難解でわかりにくい険怪奇渋の「太学体」の古文を全て排斥し、分かりやすい古文を採用したことと軌を一にしている。[7] この意味において、王禹偁は後に北宋の文壇で行なわれた歐陽脩の文体改革の道筋を切り開いた人物として位置づけられると言えよう。

さて、王禹偁のもとに集まった古文家達の中で傑出した存在と言えるのが、孫何（九六一―一〇〇四）及び丁謂（九六六―一〇三七）の二人である。『宋史』巻二八三、丁謂伝に王禹偁と孫何、丁謂の関連を次の如く言う。

> 柳宗元より後、二百年始めて此の作有りと。世に之れを孫・丁と謂ふ。
> 少(わか)くして孫何と友善にして、同に文を袖し王禹偁に謁す。禹偁大いに驚き之れを重んじ、以為らく、唐韓愈・

王禹偁は、孫何・丁謂の二人の文章を見てすぐにその優れた才能・素養を見いだし、高く評価していたのである。そこで、丁謂・孫何と王禹偁の繋りを具体的に見てみると、まず丁謂について言えば、淳化二年（九九一）に作られた王禹偁の「送丁謂序」の中で次のように言う。

今春、生果して來り、益すに新文二篇を以てし、書を爲し以て我に投ず。其の間に律詩、今體賦文有り。向の進士と號する所の者の能く及ぶに非ざるなり。其の詩は杜子美に效ひ、深く其の間に入る。其の文數章は、皆な意常ならずして語俗ならず。若し韓・柳集中に雜ふれば、能文の士をして之れを讀ましむるも、之れを辨ぜざるなり。是れ由り兩制の間、咸其の面を識りて其の心を交ふるを願ふ。翰林賈公、尤も歎服を加ふ。

丁謂は、王禹偁に自己の作品を献呈した。一方作品を受け取った王禹偁は、とくに韓愈・柳宗元にも匹敵する古文の力量に着目し、その文章は韓愈や柳宗元の文集に混入させても区別がつかない程素晴らしい古文だとして高く評価する。この王禹偁への作品の献呈をきっかけとして、丁謂は翰林学士賈黄中をはじめとする当時の高級官僚達と面識を持つようになる。いまだ科挙に及第していない丁謂が、この様に有力者達と交流できたのは、当時自からも知制誥という要職にあった王禹偁の働きかけがあったと思われる。

一方、孫何も王禹偁へ自己の作品を献呈している。

今年の冬、生再び闕下に到り、始めて吾が門を過る。我に新文を博め、且つ先ず將に書を以てす。猶ほ尋常の貢擧人の若く、恂恂然として先後の禮を執る。（「送孫何序」）

今年の冬とは淳化元年（九九〇）の冬のことで、孫何が科挙に合格する二年前のことである。王禹偁は「送孫何序」の中で続けて以下のように述べる。

會〻生の集を編むを以て余に惠む者有り。凡そ數十篇、皆六経を師載し、百氏を排斥す。落落然として真に韓・柳の徒なり。

王禹偁は、孫何の古文は六経に基づき、その文章の風格は、韓愈・柳宗元に匹敵すると見なす。この様に、王禹偁に高く評価されたことを契機として、世間にその名を轟かせた孫何や丁謂は、王禹偁に作品を献呈した後にはじめて挙行された科挙に二人揃って見事に及第を果たすのであった。

孫何や丁謂と同じように、王禹偁を頼って集まった古文家達に、たとえば黄宗旦や鄭褒、高弁などがいる。黄宗旦は、至道元年（九九五）に王禹偁が左遷された後に、彼のところへやって来て作品を献呈し、知遇を求めた。王禹偁は黄宗旦の文章について、「今、足下の文は、二子の文なり。天下將に之れを知らんとす。豈に某の一人に止

まらんや。」（答黄宗旦第一書）と述べる。王禹偁にとって、孫何・丁謂の二人は最も高く評価していた弟子であり、黄宗旦の文章をその二人の文章に相当すると認めたことは、他でもなく黄宗旦も高く評価していることを意味する。とすれば、黄宗旦が王禹偁に献呈し指導を仰ごうとした文章は、孫何・丁謂に優るとも劣らない古文であったと言えよう。

また、王禹偁は自分に作品を献呈してきた鄭褒の文章について次のように述べる。

退きて、其の文句を閲するに、辭甚だ簡にして、理甚だ正し。數千百言と雖も、一字の冗長無く、真に古人の述作の旨を得るのみ。……是れ生の道、孫・丁と同じ。而れども命未だ遇せず。（答鄭褒書）

ここでも王禹偁は、孫何・丁謂を引き合いに出して、鄭褒の作品に貫かれている道は、彼ら二人に比べても少しの遜色もないとして高く評価する。よって、鄭褒が王禹偁に献呈した作品は、古文を中心としたものであったと言えよう。

以上の考察から、北宋初期には古文家王禹偁のもとに多くの文人達が集まり、彼らは古文の作品を献呈することによって、王禹偁に知遇を求めたことが明らかになった。つまり、当時の文壇では、確実に王禹偁を核とした古文家達の集団が存在していたことになる。これらのグループには、孫何の弟孫僅や次に挙げる高弁がいた。

弱冠にして、徒歩にして種放に従ひ終南山に學ぶ。又た古文を柳開に學び、張景と名を齊しうす。至道中、文を以て王禹偁に謁し、禹偁之れを奇とす。進士に擧げられ、侍御史を累官す。（『宋史』巻四三二、高弁伝）

この記述によれば、古文家高弁は王禹偁の知遇を得た結果、見事進士及第を果たし、官界へ進んだのがわかる。ところで、当時の科挙試験の状況はどうだったのか。すなわち古文を習得することは、科挙試験に有利だったのだろうか。科挙で重視された文体について、咸平五年（一〇〇二）に書かれた張知白の上奏文に次の如く述べる。

今の進士の科、大いに時の進用する所となる。其の選や殊にして、其の待や厚きなり。……然る後、策論を先にし、詩賦を後にし、治道の大體を責め、聲病の小疵を捨つ。此の如ければ、則ち夫の進士の流をして、其の習ふ所の書、簡にして限有るを知らしめ、其の学ぶ所の文、正にして要有るを知らしむ。

（『續資治通鑑長編』巻五三）

張知白の主張は簡潔に言えば、科挙の進士科の試験で表現上の技巧を重んじるのではなく、内容を重視すべきだと言うことになる。つまり、彼は古文によって受験生を採用するよう主張しているのである。これは裏を返せば、当時の科挙の実態が内容よりも表現技巧を重んじ、一定の制約を満たした文章、すなわち駢文の出来ばえによって合否を決定していたことを物語っている。

当時の社会状況からみると、古文作成だけでは生計をたてられない以上、古文家といわれる文人達も、他の文人達と同様に官僚となることを目指して日夜知的修練を積んでいた。王禹偁を中心とした古文家達も古文のみを墨守して科挙で重視された駢文作成の技量を磨かなければ、科挙及第を果たすことができないのである。とすれば、古文家達は、表面的にみると、自己の信奉する古文と科挙で重視された駢文という、相反する文体を同時に習得して使いこなしていることになる。この二つの文体作成の有機的連関をどう考えたらよいのか。

三

それを考える手がかりとして、本稿では既にみてきた科挙の事前運動である行巻に着目したい。まず、唐代古文運動における駢文と古文の関連について、程千帆は『唐代進士行巻与文学』の中で次のように言う。[8]

> 韓愈達は仕官すると、文壇において古文の旗印を高くかかげたばかりでなく、後進を推挙するための力をもち、しかも積極的に推挙したので、多くの後進はすすんでその文学上の主張をうけ入れ、こうした主張に合致する作品を積極的に書き、彼らに献呈して、自分を知ってもらおうとした。そこで韓愈達は、後進と接触するこうした機会を利用して、大いに古文を宣伝し推進したのである。このことはすぐさま連鎖反応を引き起こし、その反応は当時新しく興ったばかりのこの文学運動を促進する上でいっそう有利に働いたのである。

韓愈ら中唐古文運動のリーダーやその賛同者達は、いずれも進士科出身であり、決して科挙試験を無視・排斥していない。彼ら古文家達は、古文の文体を用いた行巻によって、有力者に事前運動を行う。行巻を受けた古文に理解ある有力者は、他の有力者に古文家を推薦し、それによってその古文家の世間での名声は次第に高まっていく。

こうした有利な条件のもと、その古文家は駢文を駆使して科挙を受験し、事前の名声の高まりも相俟って、合格をかち取るのである。ここに科挙で重視された駢文と古文は、全く対立するものではなくなる。むしろ、韓愈ら古文家達は、積極的にこの行巻を利用し、古文運動を推し進めたのであった。ただ、残念ながら、前述した如く程千帆には、宋初における行巻を利用した古文運動への論及はない。

しかしながら、既にみてきた如く科挙制度が未整備であった宋代初期には、明らかに行巻の制度が残っていた。そこで、この行巻に着目して、前述の王禹偁と古文家達の繋りをとらえ直してみる。王禹偁は、「送丁謂序」の中で次の如く述べる。

既に歳満ち、西掖に入り誥を掌り、且に二年にならんとす。是れ由り今の擧進士なる者、文を以て相售るに歳に數百人を下らず。朝請の餘、歴覧して怠ること忘し。然れども其の命題を視て罷むる者有り。數句を讀みて倦く者有り。一篇を終へて止る者有り。或ひは詩は采るべきも、其の賦は則ち有る無きなり。或ひは賦は稱るべきも其の文は則ち有る無きなり。能く之れを全ふする者は、百に四五ならず。

「擧進士」とは、解試合格者で次に省試及第を目指す受験生である。一年に数百人を下らない擧進士たちが、省試受験以前に文壇の有力者王禹偁のもとへ自分の作品を献呈してきたのだから、それらの作品は行巻と考えて間違いない。この様な多くの行巻を、王禹偁は朝請後に目を通し、その結果多くの場合は題名、あるいは冒頭の数句、または最初の一篇を見て残りの作品を読む気がしなくなると言う。たまに良い作品に出会っても、詩は良いけれども賦の力がなく、賦は良いけれども文章力がない等、なかなか素晴らしい素質を持った受験生に巡り会わないと述べる。ここに行巻を受け取った側の嘆きが端的に表れている。

ところで、注目しておかねばならないのは、なぜかくも多くの受験生が王禹偁のもとに行巻を殺到させたのかと言うことである。それは、当時王禹偁が西掖、すなわち中書省に入り、知制誥を務めていたためである。周知の様に、知制誥は制誥を起草する任務を司どり、文辞に練達していることが要求される。よって、知制誥の任には名文家がつくことが多く文壇で尊崇を集める。この知制誥を、王禹偁は三たび経験しているのである。[9]「送丁謂序」が書かれたのは、淳化二年（九九一）でまさに最初の知制誥の任期中であり、王禹偁が文壇に大きな影響をもち始め

た頃である。かくの如く、王禹偁が高位の官職に就いていたことが彼のもとに多くの文人達が馳せ参じた大きな理由であろう。しかし、官職のみによって、受験生が行巻を送る人物を決定したのならば、他の高位高官の有力者にも同様に行巻が殺到したはずである。にもかかわらず、王禹偁のもとに一年に数百人を下らない受験生の行巻が集中した理由は、彼が高官であったとともに、今一つは彼自身が「後進に詞藝有る者、意を極めて之れを称揚す。」（『宋史』巻二八三、王禹偁伝）と言われるように、後進を積極的に誘掖し、啓発することを惜しまなかったからであろう。

行巻を受け取った王禹偁は、如何なる態度をとったのか。たとえば、王禹偁の弟子のなかで最も傑出した存在であった古文家孫何と丁謂について王禹偁は次のように言う。

天下の舉人、日々文を以て我が門に湊る。……其の中、郡萃に傑出する者は、富春の孫何、濟陽の丁謂を得るのみ。吾嘗て其の文を以て宰執公卿間に誇大す。（答鄭褒書）

王禹偁が孫何・丁謂の二人を積極的に官界の有力者に推挙し、世間にアピールしていたのがわかる。行巻を受け取った側が有力者に推挙する、こうした行動は、前述した如く「延誉」と言われていた。王禹偁が二人を推挙した行動を『石林燕語』巻一〇では、

王元之（王禹偁の字）素より釋氏を喜ばず。始め知制誥爲りしとき、名、一時に振ふ。丁晉公・孫何、皆門下に游ぶ。元之も亦た力を極めて延誉す。是れ由り衆多側目す。

と、延誉という語句を使ってはっきりと説明する。王禹偁の力を窮めた延誉行動は、多くの人の妬みを買うほどであったが、孫何・丁謂の二人は、誠に王禹偁の延誉を受けた後にはじめて行われた科挙で及第を果たしている。

また、王禹偁が中央の官職を辞した際にも、彼の文壇における影響力を頼って、多くの受験生が知遇を求めにやってきたことを、「答鄭褒書」では次の如く言う。

進士林介なる者有り。吾が家に食すること七年なり。私かに吾に謂ひて曰く、今茲、召（みことのり）して貢擧を罷め、而して足下郡に出づ。進士皆滁上に疾走し、文を以て知を求めんと欲すと。吾、介に謂ひて曰く、吾が爲に諸公に謝し、慎んで滁上に来たる勿かれ。吾、復びは進士の臧否を議し、以て謗りを賈はず。……

王禹偁が至道元年（九九五）に翰林学士をやめ、知滁州として地方へ転出するに当たって、多くの文人達が彼を頼りにし、延誉を求めようとした。その際、王禹偁は受験生の臧否を議論することによって、再び人々のそしりを買いたくないと自己の胸臆を率直に吐露した。これは逆に言えば、王禹偁が自己の文学上の見解と近い文人達を行巻によって見つけだし、積極的にあるいは強引に延誉し、そのため時には妬まれ、反感を買っていたことを表している。しかし、孫何や丁謂をはじめとして、行巻を利用し自分と見解の近い古文家を見いだし、積極的に延誉することによって官界に進出させ、文壇での古文復興の潮流をリードし大きくしていくやり方こそ、まさしく王禹偁の古文運動の実践であった。

さて、行巻を受け取った王禹偁は、ただ単に延誉だけを行うのではなく、見込みのありそうな文人に対しては、古文作成の指導も行っている。行巻を献呈してきた張扶に対して王禹偁のとった態度は、「再答張扶書」にみえる。

今、子進士に擧げられんと欲するも、文を以て太玄に比す。僕未だ之れを聞かざるなり。子又た謂らく六經の文、語艱にして義奥なる者十に二三、道ひ易くして曉り易き者十に七八、其の艱奥なる者、故に爲すの語に非ずして、當に然るべしと。今、子の文は則ち然らず。凡そ三十篇、語皆な迂にして艱なり。義皆な昧にして奥なり。豈に子の文や六籍に過ぎんや。

王禹偁は、張扶が揚雄の『太玄経』にならって、古文を創作しているため、その文章が難解である欠点をもつことをはっきり指摘する。そして、王禹偁は、張扶への返書のなかで分かりやすい古文を作るように指導し、あわせて進士科の受験生が『太玄経』を手本として、文章作成の修練をしたことは、これまで聞いたことがないと述べ、張扶の勉学姿勢を改めさせる。

また、後に宰相にまで昇った張知白（？―一〇二八）も、科挙の受験生の頃、王禹偁に行巻を送った。

辱けなくも、籍田賦、汙樽銘、律賦、歌行凡そ五章を示され、且つ書を以て先んじ、僕に質する所有る者の似し、何ぞ過聽自損することの是の若きや。……天下の擧公、文を以て相售ること固より亦た衆し。足下の文の如きは、實に亦た得ること鮮し。

（王禹偁「答張知白書」）

行巻によって、張知白の文学的素養・才能を見いだした王禹偁は、多くの受験生のなかであなたのように素晴ら

しい才能をもつ人物には、殆ど巡り会わないと述べ、彼を激励したのである。

以上のことを総合すると、北宋初期における王禹偁を中心とする古文家達は、行巻によって密接に結びついていると言える。王禹偁は、古文を用いた作品を行巻として送ってきた文人達に対して、古文作成の方法を具体的に伝授したり、その文学的才能を認め、それを伸ばすよう激励し指導する。また、特にその才能を高く評価した文人に対しては、王禹偁自身が直接有力者に延誉し、官界に飛翔させた。こうして多くの古文に理解のある文人達が官界へ進出すれば、それにともなって古文復興の機運が高まり、その潮流が文壇で大きくなり、文体の改革が進展していく。これこそ、王禹偁の古文を文壇に復興させる方法なのである。これを受験生側から言えば、後進の面倒みの良い王禹偁に古文の行巻を送り延誉して貰い、一方科挙の試験には駢文でのぞみ、競争率が高く難関であるものの、事前の延誉のおかげで及第を果たすことになる。つまり、王禹偁の古文復興運動は、彼の確乎不抜な文体改革への理念と、当時なお存続していた行巻の制度を巧みに取り入れ、若き古文家達を育成するという実践によって展開したのである。

四

それでは、この様に行巻によって多くの古文家を見いだし、官界へと引き上げた王禹偁自身は、如何にして官界へと進出したのだろうか。

王禹偁は科挙に及第する以前に様々な事前運動を行っているが、彼に直接的に最も影響を及ぼした人物は宋白であった。王禹偁が宋白へ事前運動を展開したことが明確に窺える作品として、王禹偁の「投宋拾遺書」が挙げられる。

> 某、嘗て杖を策し親を辭し、行潦を揭厲し、文を編み書を著し、明公の顧を求め、一たび威の重きに接す。…今年の春、始めて敢へて琴を囊み文を笈ひ、來りて輦轂に詣で、明公の門に登り以て誉を求め、明公の道を師として以て身を進む。

王禹偁は、宋白に行巻をし、その見返りとしてはっきりと「求誉」すなわち延誉を求めていたことがわかる。宋白という人物は、『太祖実録』を編纂し、また李昉とともに『文苑英華』一千巻を編んだ当時の文壇の実力者で科挙に直接三回係わっている。すなわち、太平興国五年（九八〇）には権同知貢挙として、八年（九八三）及び端拱元年（九八八）には権知貢挙として科挙を主宰している。王禹偁は、太平興国八年に宋白が権知貢挙のとき省元で省試及第を果たしているのである。宋白が司どった科挙の試験について、『宋史』巻四三九、宋白伝では次のように言う。

白、凡そ三たび士を貢むるを掌り、頗る譏議を致す。然れども得る所の士、蘇易簡、王禹偁、胡宿、李宗諤の輩の如きは皆其の人なり。

この記述によると、宋白が主宰した科挙は、世間で多くの批判がでていたことがわかる。これは、宋白がかなり恣意的に情実によって及第者を決定していたことを物語っている。彼は、二度も科挙試験の最高責任者たる権知貢挙を務めており、従って彼の意向が合格者決定に反映できた事が推測される。そのため、『宋史』宋白伝では、後に宋白を念頭に置いて、こうした合格者決定法を防ぐために科挙制度の改革が行われたと言うほどである。前述したように、王禹偁が宋白に事前運動を行い強く延誉を求めていたこと、更に情実採用によって批判を招いた宋白の主宰した科挙において王禹偁が及第していることを考えあわせると、王禹偁が宋白へ献呈した行巻は有効に働いたと言えよう。

北宋初期は科挙制度が整備される途上であったので、本来実力本位であるべき科挙試験に事前運動の入り込む余地があった。王禹偁は自分自身も事前運動を実践して官界へと進出していたので、事前運動の有効性を身をもって体験していたことになる。そして次第に社会的地位の高まっていった王禹偁は、今度は行巻を受ける側になり、自ら経験していた事もあり、積極的に後進を延誉する行動をとったのである。つまり、彼には行巻を抵抗なく受け入れる素地があったのだと言えよう。

ところで、行巻に古文の文体を用いる場合、その文体のもつ性質上自己の見解や意見を直接的に表出させやすいと言える。宋初の古文家柳開が時の翰林学士李昉に献呈した行巻「補亡先生伝」[10]では、彼自身の政治的・文学的見

解を表出させて最後に次ぎの如く締めくくる。

後、世に仕ふるに従ひて、其の道を行ふ。

ここで、柳開が後に仕官してから、この行巻で表明した自己の見解・理念を実践すると述べているのは極めて注目すべきである。

科挙の試験は、形式、テーマ、時間など全てに制約があり、必ずしも自己の意見を十分に表出できないと言ううらみがあり、しかも科挙で重視された駢文という文体自体にも表現上多くの制約があった。一方、行巻では、時間、形式、テーマなどの制約がなく、しかも本来古文という文体は、内容を重視するが故に、駢文のように形式にとらわれる必要がない。つまり、自らの理念を自由に且つ十分に表明できたのである。従って、官僚となってからの自己の進むべき政治の方向性を有力者に強くアピールすることに適していたのが、他でもなく古文の文体である。いわば自己の施政方針を訴えるのに適していたのが古文であり、ここに古文という文体を用いた行巻の利点の一つがあったと言えよう。

以上見てきたように、王禹偁を中心とした古文運動は、行巻という制度を巧みに利用したものであった。もちろん、このようなありかたが古文運動の全ての形態を指すものではない。しかし、従来の古文運動の研究ではその理念の探求は行われても、いかなる過程を経て古文家が駢文重視の科挙を突破し、官僚となっていったのか。更には、官僚となる過程において古文運動の中に古文家を如何に吸収して、その運動はどう具体的に展開したのかと言う側面は明らかにされていない。本稿での考察によって、北宋初期当時の古文運動の一形態として行巻制度が巧みに利用されていたのが明らかになった。そして、それは当時の官をもって業とした古文家達の最大の目標である科挙及第に直結して有効に機能しており、運動形態として十分に成り立つものだと結論づけられるのである。

五

さて、本章では、行巻の基本的性格に着目して考察を今少し進めてみたい。

言うまでもなく、科挙の事前運動である行巻が、全て古文の文体を用いて作成されていたと考えるのは当時の状況からみて無理がある。というのも、行巻は科挙試験前に、自己の技量・才能を有力者に知らしめる手段であるが故に、当然科挙に直結した文体、すなわち駢文の力量をアピールした文人が多数存在していたはずである。よって、当時の行巻制度が全て古文運動のために利用されたと考えることは決してできないのである。更に何と言っても、行巻の基本的性格が官僚になるための事前運動という点にあり、従ってそれは当時の政治勢力の状況と密接に関連すると考えられるのである。そこで、王禹偁を手がかりに、彼が行巻を献呈した宋白、彼に行巻を送った丁謂を取り上げ、行巻を媒介とした政治的繋りに着目して以下考えたい。

宋白が権知貢挙として主宰した科挙において、自己の権限を利用して、合格者を強引に決定してきたことは既に述べた通りだが、そのため宋白に気に入られなかった陳彭年は、才能がありながら、なかなか科挙に及第できなかった。そのことを『宋史』巻四三九、宋白伝では次のように述べる。

陳彭年進士に舉挙げられ、軽俊にして嘲謗を喜ぶ。白、其の人と為りを悪み、之れを黜落す。

ここでは、宋白が単に陳彭年を気に入らなかったと言う記述になっているが、実はこの裏には北宋初期段階の政治状況、すなわち北人官僚と南人官僚との抜き差しならない政治的対立が反映されている。華北の地に建国した宋王朝は、建国当初は当然のことながら行政最高府は北方出身の官僚によって独占されていた。ところが、天下の安定とともに南方の土地と人とに基盤を置く南方出身の官僚が北人万能の官僚群へ進出してきた。宋代における北人官僚と南人官僚の比重に就いて、青山定雄の調査によれば[11]、宋初の官僚のうち、華北出身者は、七十六人、華南は一人で圧倒的に北人有利であったが、これが建国後四十年近くたった真宗朝になると、華北百八十八人、華南二十人と南方系の官僚が進出し始め、仁宗朝では二百十一人と百十八人となり、百年余りたった神宗朝以降になると百三十八人と百二十九人でほぼ拮抗するようになる。

封建社会においては、人々は郷土の人と土地に頼り、同じ利害にたつ場合には、それらの人々と徒党を組んで事に当たった。こうした状況下で、北人官僚と南人官僚の対立が顕在化し、政治的駆け引きも生じていた。そして南人官僚の進出時期と、行巻が行われていた北宋初期は、まさに時期的に重なりあう。官僚になるためには、科挙に

及第せねばならず、しかも当時科挙制度が未整備であったので、ここに北人官僚と南人官僚の対立が露骨に持ち込まれたのである。たとえば、『續資治通鑑長編』巻八四において、北人官僚寇準は、

知樞密院寇準又言ふ「南方下國の人、宜しく多士を冠とすべからず」と。齊、遂に第一に居す。……準は性自矜、尤も南人の輕巧を悪む。既に出でて、同列に謂ひて曰く「又、中原の與に一状元を奪い得たり」と。齊、膠水の人なり。

と述べ、科挙に南方出身者が及第することを極端に嫌い、南人を「輕巧」として軽蔑する。実は、これは当時の北方人の南人に対する共通した見方で、たとえば、南人銭易は、やはり科挙に臨んだ際「輕俊」として退けられている。[12] ここで、北人宋白が南人陳彭年を「輕俊」と謗っていたことを想起されたい。この「輕巧」、「輕俊」などの評語から窺えるように、当時の北方官僚は南方人を軽佻浮薄であると批判していたのであった。とすれば、宋白が単に陳彭年個人を嫌っていたと言うよりも、陳彭年が南人であったが故に退けようとしたのがわかる。陳彭年はまた、後に北人官僚王旦によって南人の忌むべき陰険な文人「五鬼」の一人としても軽蔑されている。このように、当時南方系の官僚は、官界における既得権を侵害する存在として北方系の官僚より徹底的に嫌われていたのである。

後に、宋白が科挙の主宰を退いてやっと及第できた陳彭年は、科挙改革の必要性を訴え、宋白の事例を念頭に「請託を杜絶」しようとしたと言う。[13] つまり、宋白が科挙の事前運動によって請託を受け、当時の政治状況に鑑みて科挙及第者を決定していたことを陳彭年は強烈に批判したのである。ここで確認しておくと、宋白は決して古文家ではなく、しかも彼が採用した代表的文人のなかには、古文派とはおおよそかけ離れた西昆派の文人李宗諤らがいる。つまり、宋白は事前運動（請託）を利用して、古文家を採用しようとしたのではなく北人官僚の勢力の拡大という点を念頭に文人達を採用したと言える。

一方、王禹偁に行巻を送り、それが韓愈・柳宗元に匹敵する古文として評価され、その結果科挙及第を果たした丁謂は、科挙及第後、今度は、いわば恩師とも言える王禹偁を痛烈に批判し、そして今日では『西昆酬唱集』[14]に作品を収める西昆派の作家として知られている。この経緯については、拙稿「西昆派文人丁謂について」の中で論及したが、今一度簡潔にまとめておく。

韓愈・柳宗元に匹敵する古文の力量をもつとして激賞された丁謂が、その後古文派とは対極に位置する西昆派に与したということは、文学史のみで考えると、この間に大きな変節があったのではないかと見なされる。しかし、一人の文人が生涯古文だけしか創作しなかったというように一面的に考える事の方が無理がある。狡猾な人柄であったと言われる丁謂は、後進の面倒見の良い文壇の有力者王禹偁の心をつかみ、科挙に及第して官僚となる手段としてのみの目的で古文の文体を用いた行巻を送ったと考えられるのである。しかも、陳彭年らとともに「五鬼」と称された丁謂は南方出身であり、そのため北人官僚からは一様に冷たい目でみられ、官界に進出するためには多くの困難が待ち受けていた。そうした状況下で南人北人を分かたず有能な古文家を高く評価する王禹偁に丁謂が何とかして取り入ろうとしたことは至極当然の事と考えられる。従って、古文作成の意図があくまで官界出世の手段であり、古文が自己の信奉する文体でなかったからこそ、彼は官僚となってから、今度は官界を出世していく為に有利となる西昆派の文人達と交流し、西昆派としての姿を衒いもなく我々に見せたのである。そこには大きな文学的変節や転機などのドラマチックなきっかけを考える必要はない。そこにあるのは、丁謂の官僚を目指して一途に事前運動を展開している姿であり、官僚となってからは出世を最高の価値とする冷めた眼である。こうした丁謂の態度については、彼の真の姿を見誤っていた王禹偁が、後に「世と浮沈せんと欲し、自ら名節より堕す。竊かに謂之（丁謂の字）の為めに取らざるなり。」（答丁謂書）として痛切に批判した。また、『宋史』巻二八三、丁謂伝には、

謂、機敏にして智謀有り。憸狡たること人に過ぐ。

と述べる。これこそ、古文を使い王禹偁の延誉を得て出世を果たした丁謂の狡猾な人となりを明確に示すものであろう。しかも、あれ程までに古文を激賞された丁謂が今日に一篇たりとも古文家としての旗識を鮮明にした作品を残していない事も、彼があくまで政治的出世の為だけに古文の行巻を王禹偁に送ったことを示唆していよう。

以上、宋白―王禹偁―丁謂という行巻を媒介とした繋りを考察してきた。行巻は、官僚になるための事前運動という性格から明らかなように、時の政治状況と密接に結びつく。たとえば、王禹偁は自らと文学的主張が一致する古文家を行巻で見つけだして延誉し、彼らが科挙合格を果たし、官僚となることで結局自身の政治的・文学的勢力の拡大をはかった。この点において、王禹偁の政治勢力の拡大は、古文運動の展開と一致していた。一方、宋白は、

当時の北人官僚対南人官僚という政治的対立のなかで、行巻によって自己に有利な北人派の勢力拡大をはかった。その過程で、古文家王禹偁や田錫など北人が官界へ進出したけれども、陳彭年をはじめとする南人は結局進出を阻まれた。また、韓愈・柳宗元に匹敵する古文の作家として高く評価された丁謂は、古文家を積極的に延誉した王禹偁の勢力拡大の流れに乗って官界へと進出した。ところが、彼は官界への進出を果たした途端、古文に見向もしなくなったことから明白なように、古文を自己の信奉する文体とは決して考えていなかった。そのため、科挙及第後政治的出世のために、今度は容易に西昆派へと向かって行ったのである。従来、古文運動は、文学運動という前提のみに基づいて考察がなされていた。しかし、宋白－王禹偁－丁謂の僅か三人の繋りを考えただけでも、そこには当時の政治状況、官僚としての処世態度などが複雑に関わり合っていたのがわかる。つまり、古文運動を考えるファクターは文学史という土俵の中だけでは決して収まりきれないのである。

おわりに

古文家は官僚もしくはそれを目指す存在であり、駢文作成の技量は必須の条件なのである。古文家が職業作家ではなく、古文の作成によって生計をたてる事ができない以上、科挙に及第して官僚となっていくという側面は決して無視できない。北宋初期当時は科挙制度が未整備なるが故、本来実力本位である科挙に様々な情実が入り込む余地があった。そこに政治勢力との関連が生まれ、官僚になれば必然的に当時の政治潮流の渦の中に放り込まれることになる。とすれば、古文運動をこれまでのように純粋な文学運動としてのみの観点からとらえようとすれば、その実態を見失う恐れがある。むしろ当時の大きな政治潮流のなかで、古文運動を考え直す必要があろう。本稿では、その試みとして古文家が官僚となるプロセスに着目し、行巻という制度を媒介とした古文運動の実践と政治状況とのつながりを考えてみた。これは、当時の古文運動の一形態に過ぎないけれども、しかしながら本稿の考察によって、古文家の闘争対象が駢文であるとのみ強調することは正しくなく、また古文運動を純粋な文学運動としてのみで把握するのも誤りであることが明らかになったと考える。

※本稿は、平成四年度九州中国学会（平成四年五月二十四日 於長崎大学）での発表原稿に基づき加筆修正を加えたものである。尚、論旨の関係上、拙稿「西昆派文人丁謂について—王禹偁の古文運動と関連して—」（鹿児島大学文科報告第二十七号第一分冊、平成三年九月）と一部重複する部分があるので合わせて参照されたい。

注

（1）東洋史研究会、一九六九年三月発行。

（2）前掲『宋代科挙制度研究』二二四、二二五頁参照。

（3）『續資治通鑑長編』巻四参照。

（4）上海古籍出版社、一九八〇年。三頁の記述。尚、該書には松岡栄志、町田隆吉氏の日本語訳があり、『唐代の科挙と文学』として凱風社より一九八六年に出版されている。以下、この程千帆氏の著書を引用する際には松岡、町田両氏の日本語訳を引用させて頂く。

（5）『唐代文学論集』上・下（中華書局、一九八九年）。

（6）高津孝「宋初行巻考」（鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第三六号、平成四年十月）において、行巻を受けた者がとる延誉についての詳しい説明がある。

（7）拙稿「「太学体」考—その北宋古文運動に於ける一考察—」（『日本中国学会報』第四十集、昭和六十三年十月）参照。

（8）七〇頁の記述。

（9）最初は、端拱二年（九八九）三月から淳化二年（九九一）九月、次は淳化五年（九九四）五月から至道元年（九九五）五月、最後は至道三年（九九七）六月より咸平元年（九九八）十一月までである。

（10）柳開の「上主司李学士書」の中に「以開所納文中、有東郊野夫及補亡先生二伝以観而審之」とあり、「補

亡先生伝」は柳開が李昉に送った行巻であることがわかる。

(11) 青山定雄「五代宋に於ける江西の新興官僚」(『和田博士還暦記念東洋史論叢』、昭和二十六年)参照。

(12) 『宋史』巻三一七、銭易伝。

(13) 『宋史』巻二八七、陳彭年伝。

(14) 『鹿児島大学文科報告』第二十七号第一分冊(平成三年九月)。